

平成19年度 三重県教育改革推進会議

第5回 特別支援教育部会【議事録兼概要】

I 日時 平成20年3月24日（金） 13:30～16:00

II 場所 JA三重健保会館 中会議室

III 出席者 【委員】小笠原 まき子、加藤 正彦、川岡 加寿子、木本 博文、西田 寿美、
平野 雅也、藤井 明宣
【事務局】鎌田 敏明、坪田 知広、増田 元彦、土肥 稔治、梶原 久代、
中谷 文弘、大原 喜教、東 直也、小林 哲也、
北原 まり子、安田 政与志

以上18名敬称略

IV 内容

1 報告

(1)第4回特別支援教育部会における意見抜粋…資料1に基づき、土肥特命監から報告

《以下質疑応答》

【委員】

玉城わかばもかなり生徒数が増えてきている。検討課題として残しておいて欲しい。

【事務局】

第一次実施計画に、検討課題として記述してある。

【部会長】

特別支援教育のあり方について、意見があればお願いしたい。

【委員】

特別支援教育が本格実施して1年、特別支援教育の捉え方が学校や教職員によって異なるのは、子どもたちの実態が多様化し、教職員側の指導や対応に多様な課題が出ているからである。実態把握をして、現在の課題と今後の方向性を検証して欲しい。条件整備等現場だけでは対応できない部分があるので、その辺を支援して欲しい。今学ばなければならないことのポイントを押さえられる研修を、現場に下ろして欲しい。個別の教育支援計画は立てているが、具体的な指導や支援の方法の理解・実践の不充分さに対して、指導や研修をして欲しい。通級教室の適正な配置、通級教室の活用のあり方も検証して欲しい。

【部会長】

特別支援教育が始まったこの1年間で、何が課題になったのか。またその課題を次年度以降解決できるかどうかの検証ができるのか。実際現場で応用できるような研修計画が今後もあるのか。個々の支援計画がうまく機能しているのか、またその内容が真に的を射るものとなっているのか、検討する場はあるのか。

【事務局】

各市町からいろいろな課題が挙げられているので、今から検証していきたい。研修についても、課題に対応してこれから実施していきたい。

個別の指導計画・教育支援計画の書き方、計画の立て方を中心に取り組んできたが、今後は実際どのように支援していくかに重点を置いて取り組んでいきたい。支援計画は、特別支援学校のコーディネーターや巡回相談員など専門家の意見を聞きながら、関係機関全てが関与し、子どもの実態に合わせて作っている。常に計画を見直しながら更新もしている。

【委員】

来年度からコーディネーター加配を付けていただいた。各学校によって時間数は違うが、加配を付けていただいた以上、それなりの貢献をしていかなくてはいけないと思っている。

【委員】

特別支援教育の対象となった方にアンケートを取り、評価してもらってはどうか。内部の啓発になる。卒業した人を対象にし、出す窓口を別にすると正直な感想が得られる。最初はショックを受けるが、次の年に変化したところを現場に返せば、その分やる気になって努力する。

【委員】

どのような内容か。

【委員】

個別の教育支援計画案の内容、実践状況、課題について、保護者の方に具体的に聞けるようなものが良い。それぞれの学校で自分たちのやったことに対して、責任をもって保護者に評価してもらおう姿勢を出せば、協力してもらえらると思う。

【事務局】

ユーザーの評価は是非聞いてみたい。サービス面全般に関するもの、就学指導委員会に関するものなど、様々なことが気になっている。やり方については、また考えたい。

【部会長】

通級について意見があればお願いしたい。

【委員】

四日市地区では一生懸命取り組んでもらっている。軽度発達障がいの人たちは、対人関係が一番困っているが、担任の先生と通級の先生が連携しながら、ソーシャルスキルを取り入れている。そこに通うことで子どももほっとし、落ち着いてくる。以前から「言葉の教室」で、先生のスキルに応じて訓練してもらっていたが、もう少しグループ化してもスキルを上げることができる。通うことは大変なので、現実的に毎日の中で特別支援学級の先生がきめ細かくできるともっと良い。

【部会長】

いかに教える側がスキルアップしていくことができるかである。

【委員】

専門的スキルを持っている先生は多くいる。そういう実績のある先生をいかに使うかだと思う。実際の体験のある先生が若手の先生を指導していくようにしていかないと、途切れてしまう。チームでやれるようにしていくと有効ではないか。

【事務局】

通級の担当教員は専門的な人が多い。通常学級の先生の力も必要なので、研修の充実も含め、今後充実を図っていきたい。

【委員】

技術伝達できるように、二人体制がとれないか。

【委員】

通級に1年間通い、本当に喜んで落ち着いて生活できるようになった子どもがいる。見違えるように表情が良くなってきて、ありがたいと思う。子どもに合う合わないは、先生たちの働きやゆとりに関係すると思うので、充実してもらおうと子どもは成長できると思う。

【鎌田副教育長】

国の行革推進法で決められているので、トータルの教員の数は増やせない状況である。特別支援学級を作るにしても通級を作るにしても、学校の定数の中でどこに重きを置いていくかである。特別支援学校は生徒が増えていることから、教員も増やしている。もう一人いれば一番良いが、学校の中で学級規模に応じて人数が決められているので、交替要員が育たない状況である。難しい課題である。

【委員】

特別支援学校ではなく、小学校で取組ができると一番有効だと思う。

【部会長】

この教育改革推進会議で提言していきたい。満足度を上げるためにはスタッフを増やさなければならないし、スキルアップのための工夫と費用配分をして欲しい。教育に掛ける予算の総枠を増やして欲しい。

【委員】

予算がなくても進めていかななくてはいけない。工夫してやっていくところの情報を探しているが、なかなか見つからない。学生ボランティアの活用もあるが、四日市では三重大学も距離があって難しい。学習支援員として学校に出てきたら、大学の単位として認めるということを要望して欲しい。将来学校の教員になるための研修にもなると思う。

【事務局】

大学側が認めれば可能であると思う。一番良い制度である。

【委員】

プログラムを立てるのはベテランの先生方で、実際にやるのは若い人が工夫して、一緒に教材を考えたら良いと思う。

【鎌田副教育長】

今100人を越える学生が、ボランティアで来てもらっている。それぞれの地域に入って欲しい。どこの大学でも、教員になりたい人が早い段階から子どもと触れあってもらうことを目的としている。市町で独自にやっているところもある。大学が単位として認めるかどうかは、大学側に話をしていきたい。

【委員】

障がいのある子の小さい時からのフォローはあるが、発達障がいの子の小さい時のフォロー機能はない。小学校に入る前、早い時からの方が効果があると思う。福祉との関係もあるが、就学前のフォローを考えていく必要がある。学校の先生方が苦勞して時間を作り抜き出しをしているが、中学校ではそれができない。教科の先生の指導を受けて、別の教科の先生が教えても良いとして欲しい。特別支援学級の先生なら良いのか。

【鎌田副教育長】

教員免許状を持っていないと良いというのは大変失礼になるので、それはできない。中学校・高等学校は教科ごとの免許状なので、特別支援学級の先生でも、それぞれの科目の授業には、その教科の免許状が必要である。

【委員】

各教科の先生が学習障がいの子を教えられるように、勉強すれば良い。指導方法を勉強した先生が、特別な支援が必要な子どもを何人か、空き時間を利用して教えられるよう、学校の中で融通を利かせたら良い。それがコーディネーターの役割である。教頭ぐらいの管理者がコーディネーターをして、やらせたら良い。

【部会長】

中学校ではコーディネーターを、どのぐらいの役割の人がしているのか。

【委員】

興味のある先生が取り組み、他の先生がカバーするぐらいの学校全体の融通性があれば、学習指導は有効になっていくと思う。管理職のやる気と姿勢が大事になると思う。

【部会長】

発達障がいを理解している先生が教科担任とコミュニケーションを取り、担当する人が自発的に出られるような現場の雰囲気づくりが必要である。コーディネーターに指導力を持たせないといけない。

【事務局】

コーディネーターは、主任クラスが多い。力のある先生にお願いしているが、専門性と意欲が全て一致しているかどうかは分からない。管理職がコーディネーターと同じ考えであるという姿勢の後ろ盾がないと、後回しになっていく。そのため校内人事など、さまざまな配慮をしないといけない。学校の地域性や子どもたちの実態に応じて、管理職の認識でやってもらうよう引き続きお願いしていきたい。

【委員】

特別支援コーディネーターとして、専門の教頭を配置してはどうか。学習支援に関しても、初めからプロでなくても、やる気がありやり方さえ分かれば指導できるようになる。ただ、やれるような状況を作る必要がある。

【部会長】

管理職がコーディネーターをやっているところは、どのくらい働きやすいのか、役割や効果を検討していく必要がある。

【委員】

その子のどの部分が弱いのか、専門的知識を持った人が分析し、それを下ろしてもらいうまく連携できたら、もっと先生を有効に使える。子どもをめぐって関わる先生が、実際にどう役割分担して教えるのかケース検討すれば、一番うまく連携できる。

【部会長】

ケース検討を是非して欲しい。

【委員】

学校ではコーディネーター中心に校内委員会をやっているが、その子に合った十分な適切な対応になっているかどうかは問題である。

【部会長】

本当にスキルアップできる校内委員会としての機能があるかどうかである。

【委員】

大々的にしなくても連絡網さえうまくいけば、学年会議に「言葉の教室」の先生に来てもらい、一緒に話し合うことも有効になると思う。

【部会長】

校内委員会のあり方、内容についても、きちんとケース検討がされ、スキルアップを目指すようなものにして欲しい。

【委員】

ケースによっては、保護者に入ってもらった方が良い場合もある。

【委員】

発達障がいの子が、社会性の問題から生徒指導の問題を起こしてしまうことがある。そういう認識がされないまま生徒指導がなされると、うまくいかない。「こういう子は前にもいた」だけで片付けられることがないように、管理職の先生の理解が必要になってくる。

【部会長】

非行なのか病気なのか見極めも大事で、どういう教育をすれば良いのか、生徒指導の面からも考えるのが本当の意味でのケース検討である。

【委員】

中小企業は人、物、金、情報が不足しているが、教育も同じで、こういったものを集約していけば良い形になっていくと思う。就学前健診は有料なのか。是非三重県らしい特別支援学校を作って欲しい。

【部会長】

就学前の健診は巡回指導し、教育委員会が把握した障がい児に関しては相談し、最終的には保護者の意志で決められる。

【事務局】

各市で設置している就学指導委員会は、専門的立場の方に参加していただき、一緒に相談してもらっている。特別支援学校に入る場合、県教育委員会に報告される。その場限りで決めるのではなく、普段から相談を受ける中で、保護者の思いも聞かしてもらいながら決めていくことを目指している。就学前の健診に関しては、無料である。

【委員】

以前の就学指導委員会は5歳児だけを対象としてきたが、委員会の名前も「就学支援委員会」に変える。小学校から中学校卒業前までを対象に、行き先を決めるだけでなく、どのような支援が必要か話し合えるよう、踏み込んだ形に変わっている。4歳児以下の相談もしている。保護者も教育に対する関心が高く、中学校卒業まで対応している。

【委員】

1歳半健診だけで障がいの有無を判断することは危険である。県内でも7市町村ぐらいが、子ども中心にフォローするシステムを作ろうとしているが、市町ぐらいの規模であれば保健師などがずっと関わることができ、子どものことがもっとよく分かるようになってくる。子どもの障がいに最初に気づくのは母親であり、次に集団活動の中で保育士や幼稚園の先生が気付く。そこで障がい児をチェックするのではなく、困っている子を支援するようなスキルアップができれば、一緒に相談に行くという一番良い形になる。そういうことに県の事業も予算を付けているので、期待している。5歳くらいは集団の中で見ないと分からない。子育て支援として考えて、教育委員会と福祉と医療と全部がつながっていくと一番良い。

【委員】

個別の指導計画や個別の教育支援計画を形としては作っているが、子どもから発しているサインをそこに書いていく必要がある。こういうサインをしたらこういう困り感があり、こういう対応をすとか、書いていくことで次に進んでも子どもの居場所ができる。実働的に動けるもの、本当に引き継げるものにしていく必要がある。校内委員会やケース検討会議に招いていただけるなら、小中学校の先生方と一緒に考えたい。

【部会長】

生育記録の中に子どものサインが書かれ、教育する人がそれを知っていなければいけない。それで初めて個別の指導計画や個別の教育支援計画になる。

【委員】

保護者や医師とも共有できなければいけない。

【部会長】

保育所など、教育関係と外れている健康福祉部関係の機関とも連携していかなくてはいけない。今健康福祉部は、モデル地区として津地区で子育て支援という観点から、生育歴をチェックするシステムを開発中である。それを教育関係者が情報共有し、小学校に入っ
てすぐに個別の支援計画に活かしていかなくてはいけない。

【事務局】

あすなる学園と一緒に、小さい時からの個別の支援計画を、今策定中である。相談窓口の一本化や各市町の支援体制を整えている。幼稚園や保育所から小学校に上がる時、保護者の方の了解を得た上で情報を引き継げるようなファイルを作成した。次年度活用してもらえるように、各地域で説明会をさせていただきたいと考えている。

【委員】

三重県は来年度子ども局を開局するので、期待している。

【委員】

特別支援学校のPTAとしての意見を代弁したい。

①西日野にじ学園の新校舎建設はありがたいが、現状は大変厳しく、児童・生徒は引き続き我慢を強いられているので、早急に進めて欲しい。

②特別支援部会には、特別支援学校のPTAも配置して欲しい。

③現状把握のため、継続して現場に来て現場の先生の声を直接聞いて欲しい。

④特別支援教育の本来の姿は、高等学校も含めて地域の学校で共生して育むべきである。本来地域の学校で学べるはずの子どもたちまで、特別支援学校に来る状況を見直すべきで、地域で学びやすい環境と、特別支援教育の本来の姿を保護者や教育関係者が理解するよう進めて欲しい。

【事務局】

個人情報保護に関する誤解を払拭し、連携がしっかり取れるよう、情報伝達の引き継ぎをしてもらう通知を出した。個人情報をうまく使っていくことが、全ての教育活動の源泉なので、この通知で浸透していくことを願っている。個別の就学支援ファイルに関しては、市町に任せていたがなかなか広まらないので、県として模範的モデルを作った。この2つで、これまでよりは見える形で連携と一貫した教育支援が進むのではないかと考えている。こういう支援システムをさらに作っていききたい。またさらに検証して、改善するような方策を講じていきたい。

(2)本年度審議のまとめについて…資料2に基づき、土肥特命監から報告

《以下質疑応答》

【部会長】

今日の議論もこれに加えて最終的なとりまとめになると思うが、どういう形でまとめていくのか。

【事務局】

今日の意見も入れてまとめ、できるだけ早く、委員のみなさん方に郵送とメールで送らせていただく。

【部会長】

今日新しく議論していただいたこと以外で意見があればお願いしたい。

【委員】

①「Ⅰ三重県の特別支援教育の現状について」に、特別支援学級や通常の学級に在籍している軽度発達障がいの子どもの教育に関する現状と課題も挙げて欲しい。

②「Ⅲ 1（1）今後の方向性」に総論をまとめてあるが、現状や課題を把握した上でどう変わるべきかをもう少し記述的に充実させ、ふくらませて欲しい。

③「Ⅳ 3（1）盲学校・聾学校の在り方や（2）寄宿舎の在り方」は大きな項なので特出しし、後は地域による違いを挙げた方が分かりやすいのではないかと。

④特別支援教育を本当に実施していくために、受ける側や施設に対する支援、課題改善の要望を見えるような形で挙げて欲しい。教育行政がどのような支援をするのか、挙げて欲しい。

【事務局】

特別支援学級については2の②に記述があるが、項を起すかどうか再考したい。盲学校・聾学校や寄宿舎に関しては、中勢地域に偏っているという課題からここに挙げたが、特出しするかどうか再考したい。

【部会長】

寄宿舎のあり方をどうしていくのか、課題がどこにありどこを改善していかなければいけないか、分かりやすい文面にして欲しい。

【委員】

今後現場の声を聞きながら、まとめて欲しい。

【部会長】

まとめについて意見がなければ、事務局から報告事項があるので、お願いします。

県立特別支援学校整備第一次実施計画について…別冊資料に基づき、土肥特命監から報告

【部会長】

ありがとうございました。これまでの4回の部会で検討されたことも加味されて、実施計画をまとめていただいたということである。これについて質問はないか。

無いようであれば、今後の予定について事務局からお願いします。

【事務局】

部会の今後の予定については、教育改革推進会議の本会議に委ねていきたい。部会のまとめを本会議にあげ、さらに議論していただきたいと思っている。委員のみなさんにいただいた意見は、今後の特別支援教育の充実に反映していきたい。半年間審議していただいたが、本日で終わらせていただきたい。ありがとうございました。

【部会長】

まとめに関しては、事務局の方で一旦まとめ、それに対して委員のみなさんにご意見をいただき、再度変更し最終的なものをもう一度送っていただくということで、会議は本日で終了ということになる。

【委員】

この部会の存続については、本会議の委員の議論に委ねるとのことか。

【部会長】

そういうことになる。本会議は今後も続くのか。

【鎌田副教育長】

教育改革推進会議はずっと続くものである。必要な部会は、その都度推進会議で決めていただく。この部会についてはひとまず今日区切りをつけるが、本会議で今後も研究が必要ということであれば、改めてこのメンバーで引き続きお願いすることになる。その時に改めにご連絡させていただきたいと思っている。

【部会長】

長い期間ありがとうございました。

【事務局】

どうもありがとうございました。

(3) その他

なし

以 上